

中世末期日本語のウチ(二)節における ～テイルと動詞基本形

——状態化形式の文法化をめぐって——

福嶋 健伸*

キーワード：ウチ(二)、～テイル、動詞基本形、文法化、限界性 (telicity)

要　旨

中世末期日本語のウチ(二)節の節述語を調査すると、現代日本語の場合と比べて～テイルの例が少ないと、また、これらの～テイルの例には、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を表していると解釈できる例がないこと等がわかる。一方、中世末期日本語のウチ(二)節の節述語には、動詞基本形の例が多く、具体的な動きのある動作継続を表していると解釈できる例は、全て動詞基本形である。これらのことから、中世末期日本語の～テイルが、現代日本語の～テイルほど自由に弱進行態を表していたとは考えられず、当時の～テイルが表しにくかった部分は動詞基本形が担っていたことが窺える。

また、ウチ(二)節の節述語に見られる～テイルと動詞基本形の分布の偏りは、ウチ(二)節のみにとどまらず、概ね中世末期日本語全体を通して見られるものであり、当時の～テイルの文法化的度合いを反映していると解釈するのが妥当である。すなわち、当時の～テイルは、まだ、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を、十分に表せる段階ではなかったといえる。

1. はじめに——動機と目的、及び結論——

本稿では、中世末期日本語のウチ(二)節の節述語において、～テイルと動詞基本形が、どのように分布しているかを観察し、現代日本語を参考にしながら、その分布が意味するものについて考える。この節では、本研究の動機を簡単に述べ、具体的な目的を確認する。その後、本稿の主要な結論を提示する。

* 日本学術振興会特別研究員 (DC2)

e-mail address:fukusima@lingua.tsukuba.ac.jp

1.1. 本研究の動機と目的

坪井 1976、柳田 1990 等の先行研究では、中世末期日本語の～テイル・～テアルは進行態¹を表していたと指摘している。これらの研究を受けて、福嶋 2000a、福嶋 2000b では、中世末期日本語で当該の形式が動作継続を表していると解釈できる場合を中心に考察を行い、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続²）として解釈できるか否かという観点から、「当時の～テイル・～テアルには、動的な動作継続を表していると解釈できる確例は、発話に関係する例を除くと極端に少ない」ということを指摘した。また、主に主節末のデータを見ると、動的な動作継続を表していると解釈できる場面には、動詞基本形が使用されており、当時の～テイル・～テアルが表しにくかった部分を動詞基本形が補っていたこともあわせて指摘した。

これらの指摘から、強進行態 (telic 動詞の進行態のこと。金水 1995 参照) と、弱進行態の一部 (atelic 動詞の進行態の中でも具体的な動きのあるもの) は、当時の～テイル・～テアルでは表しにくいことがわかり、当時の～テイル・～テアルと動詞基本形の分布状況を記述する際には、強進行態 (telic 動詞の進行態) / 弱進行態 (atelic 動詞の進行態) というような分類だけでは不十分であることが窺える。つまり telicity という概念（この概念に関しては主に Comrie 1976 を参照した）からの分類だけでは、不十分なのである。

しかし、一方で「主節末のデータは文脈の解釈に偏りがあるので、たまたま具体的な動きを表していると解釈できる場面が少なく、用例が採取できなかっただけで、中世末期日本語の～テイル・～テアルは、弱進行態を問題なく（現代日本語の～テイルのように自由に）表していたのではないか」あるいは、「中世末期日本語の～テイル・～テアルは弱進行態を表しているという記述だけで十分であり、結局、当時のアスペクト形式の分布状況（ひいては文法化の問題³）を考察する際には、telic /

*1 以下、便宜上、「進行態」という用語のかわりに、「動作継続」という用語を使用する場合がある。

*2 動的な動作継続とは、副詞「ゆっくり」を付けたときに、具体的な動きの速度が遅いという解釈ができる動作継続のことである（「(ゆっくり) 走っている」「(ゆっくり) 円を書いている」等）。

*3 本稿では、「イル」等が語彙的意味から解放され、状態化形式（～テイル等）が成立することを文法化の問題として捉えている。文法化(grammaticalization)の概念については、金水 2001、Comrie 1998、Bybee et al. 1994 等を参考にした。

atelic といった *telicity* の観点を導入するだけで十分なのではないか」といった観念が、全くないわけではない。

文脈の解釈に搖れができるということは、事実上、仕方のない場合もあると思われる。しかし、解釈の搖れが比較的少ない環境に注目し、～テイル等の分布状況を考察することによって、上記のような観念を、ある程度検討することはできるだろう。

そこで、本稿では、時間関係を表すウチ（二）節^{*4} の節述語に注目して考察を行う。ウチ（二）節に関する具体的な議論は第2節で行うこととし、ここでは、本稿がウチ（二）節に注目する理由を簡単に述べたい。まず、時間関係を表すウチ（二）節の節述語の解釈は、ウチ（二）節の基本的機能と連動して、比較的、解釈の搖れが少ないと考えられる。また、ウチ（二）節の節述語には、～テイルも動詞基本形も現れうるので、～テイルと動詞基本形がどのように分布しているのかが把握できる（今回の調査では、ウチ（二）節の節述語に～テアルの例はなかったので、以下では、～テイルと動詞基本形を中心とする議論になる）。さらに、ウチ（二）節の節述語に *atelic* な動詞（句）が現れた場合は、比較的、弱進行態の解釈を得やすいので、当時の～テイルが弱進行態を問題なく（現代日本語の～テイルのように自由に）表していたかということが検討するのに適している。

本稿では、中世末期日本語のウチ（二）節の節述語にみられる～テイルと動詞基本形の分布状況を把握し、当時の～テイルが弱進行態を問題なく（現代日本語の～テイルのように自由に）表していたか否かを確認した後、～テイル・動詞基本形の分布が何を反映しているのかについて考察したいと思う。

本稿の目的を以下にまとめる。

- (1) (i) 中世末期日本語のウチ（二）節の節述語にみられる～テイルと動詞基本形の分布状況を把握する。
- (ii) 当時の～テイルが弱進行態を（現代日本語の～テイルのように）問題なく表していたか否かを確認する。
- (iii) 当時のウチ（二）節の節述語にみられる～テイルと動詞基本形の分布が何を反映しているのかを考察する。

*4 時間関係を表しているのであれば、ウチ節もウチニ節も、ともに考察の対象としているので、これらをまとめてウチ（二）節と表記する。また、以後、特に断りの無い場合、ウチ（二）節とあれば、時間関係を表すウチ（二）節のことを意味している。

なお、中世末期日本語のウチ(二)節に関して考察する際、現代日本語のウチ(二)節の節述語にみられる～テイルと動詞基本形の分布状況が参考になるので、本稿では、第3節で現代日本語のウチ(二)節についても観察を行うこととする。

従来の研究では、中世末期日本語のウチ(二)節における～テイルと動詞基本形の分布に関してほとんど述べられておらず、また、上記のような背景から考えても本稿の考察には意味があると考えられる。

1.2. 主要な結論

本稿の主要な結論を先取りすると、次のようになる。

(2) 本稿の主要な結論：

(i) 中世末期日本語の時間関係を表すウチ(二)節の節述語において、～テイルの例は少なく、これらの～テイルの例には、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を表していると解釈できる例はない。一方、動詞基本形の例は多く、具体的な動きのある動作継続を表していると解釈できる例は、全て動詞基本形である。この点において、当時の～テイルが表しにくかった部分を動詞基本形が担っていたといえる。

(ii) 上記(i)の分布の偏りから考えると、中世末期日本語の～テイルは、現代日本語の～テイルほど自由に弱進行態を表していたとは考えられない。

(iii) 上記(i)の分布の偏りは、中世末期日本語の状態化形式としての～テイルの文法化的度合いを反映していると解釈するのが妥当である。

〈分布の偏りから考えられる～テイルの文法化的度合い〉

当時の～テイルは、まだ、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を、十分に表せる段階ではない。

本稿では、第2節でウチ(二)節の時間関係を表す機能について言及し、その基本的な部分は現代日本語と中世末期日本語とでは共通していることを述べる。第3節で、現代日本語のウチ(二)節の節述語について観察し、第4節で中世末期日本語のウチ(二)節の節述語について観察する。その後、第5節で考察を行い、第6節で結論をまとめる。

2. 時間関係を表すウチ（二）節の基本的な機能

黒慶 1978、井島 1991、工藤 1995 等を参考にすると、現代日本語のウチ（二）節は、基本的に「主節が表す出来事の発生する期間を限定する」といえる。

具体例で説明すると、次の(3)の例は、「ご飯を食べている」という出来事の期間内に、「気分が悪くなった」という出来事が発生していることを表している。

(3) ご飯を食べているうちに、気分が悪くなった

現代日本語のウチ（二）節をめぐって、いくつかの議論があるが、この基本的な部分は、事実上、多くの先行研究の共通理解になっていると考えられる。本稿でも、この「主節が表す出来事の発生する期間を限定する」ということを、時間関係を表すウチ（二）節の基本的な機能と考えたい。

このように現代日本語のウチ（二）節は、基本的に、主節が表す出来事の発生する期間を限定するので、多くの場合、ウチ（二）節の節述語は、「ある程度の時間幅を有している出来事が継続している」と解釈される。そのため、ウチ（二）節の節述語に *atelic* な動詞（句）が現れると、概ね「ある程度の時間幅を有している動作が継続している」という解釈になり、（習慣的な解釈を除けば）いわゆる弱進行態の解釈が期待されることになる。

一方、中世末期日本語のウチ（二）節は、「ロドリゲス日本大文典」及び「日葡辞書」の記述などを見る限り、現代日本語のウチ（二）節と概ね似たような状況で用いられており、（当然、相違点はあると思われるが）大筋では、ほぼ同じ機能を果たしていたと解釈できる。つまり、「主節が表す出来事の発生する期間を限定する」という時間関係を表す基本的な部分は、現代日本語のウチ（二）節と大きく変わらないと解釈できるのである⁵。

(4) 肯定動詞に後置されたものは Aida (間) の意を示す。例へば、*Iquite yru vchini vonneni caceritai.* (生きてある内に御目にかかりたい。)

(『ロドリゲス日本大文典 土井忠生訳』VCHI(内)の附則一)

*5 天野 1997 も、「ロドリゲス日本大文典」や「日葡辞書」の記述などから、中世語のホドニ節とウチニ節に関して、「いずれも、共起的時間関係・期間限定的な意味を表す現代語の「～うちに」に相当する機能を担っていたという解釈」を示している。この点、本稿もほぼ同様の立場である。

- (5) vchi.ウチ(内・中) の内部、または、する間。例、Iyemo vchi.
(家の内) 家の中。 Mairazu vchini. (参らぬ中に)
私が行かない間に。 (『邦訳日書』)

従って、ウチ(二)節の節述語が、多くの場合「ある程度の時間幅を有している出来事が継続している」という解釈になる点も、現代日本語と中世末期日本語とで、大きな違いはないと考えられる。

次に、ウチ(二)節の節述語に見られる形式について述べたい。以下の例に見るよう、現代日本語のウチ(二)節の節述語にも、中世末期日本語のウチ(二)節の節述語にも、~テイルと動詞基本形の例を見ることができる。

〈現代日本語の例〉

- (6) 話しているうちに興奮して来たのか、御主人の顔はいつしか恐い程にひきしまり、いつもは柔軟な眼鏡の奥の目は強い光を帯びていました。(雑誌)
- (7) 残りの七人の訓練をつづけるうちにいくつかの問題点があきらかになりました。 (世界の終り)

〈中世末期日本語の例〉

- (8) いかにシャント、我がまだ生きて居るうちに別の妻をば、何としてお持ちあらうぞ? (天草版伊曾保物語)
- (9) 駆のうりて、太郎くわじやひとり事云内に、つづみおけの上に、大臣まほしを置、いつもちや屋のいる所に出しまちてゐる (虎明本・駆盗人)

これらの例から、形式として、~テイルと動詞基本形がウチ(二)節の節述語として現れうるという点に関しても、現代日本語と中世末期日本語は共通していると考えられる。

ここで、中世末期日本語のウチ(二)節について補足をしておきたい。天野 1997

は、狂言台本などを資料として中世語のホドニ節とウチニ節^{*6}を比較し、「～ほどに」の場合、その上接述語には「参る」「行く」などの〈内的（＝語彙的）限界性〉がある(telic)動詞がなり、「～うちに」の上接述語には、「申す」「云ふ」などの〈内的（＝語彙的）限界性〉がない(atelic)動詞がなる(p.28)と述べている^{*7}。天野 1997 は、この分布に注目し、当時のウチニ節に関して「節述語の動作の質的な進展には光を当てず、その動作が繼續中である期間ということによって、主節の表す事態の発生の期間限定を行う(p.28)」という見解を示す。そしてウチニの上接述語に「居る」「動詞+てゐる」「動詞+否定」などの進展性の無いものが見られることから、自らの見解を補強しており、「～うちに」節は、このような状態性述語であれ上接述語となし、それにより主節事態の発生の期間限定を行う(p.29)と指摘している。

この天野 1997 の指摘から、中世末期日本語のウチ（二）節の節述語には「atelicな動詞の例が比較的多いこと」、そして「当時のウチ（二）節の特徴を考慮しても、～テイルという形式が節述語に現れることに問題はないこと」等がわかる。よって、当時の～テイルが atelic な動詞（句）の進行態を（現代日本語の～テイルのように）問題なく表していたか否かを確認するために、ウチ（二）節は比較的適した環境であるといえる。

本節をまとめると次のようになる。

（10）第2節のまとめ

〈現代日本語と中世末期日本語のウチ（二）節について〉

- ・時間関係を表す基本的な部分は大きく変わらないと解釈でき、ウチ（二）節の節述語が、多くの場合「ある程度の時間幅を有している出来事が繼續している」という解釈になる点も共通していると考えられる。
- ・述語の形式として、～テイルと動詞基本形が現れうるという点に関しても共通している。

*6 天野 1997 は、ウチニ節のみを考察対象とし、ウチ節を考察対象から外しているようなので、ここでは、ウチニ節と表記している。天野 1997 の指摘は、ウチ節に関するもので、ここでは、ウチニ節と表記している。天野 1997 の指摘は、ウチ節に関するもので、ここでは、ウチニ節と表記している。

*7 天野 1997 の注5や、本稿で扱っているデータなどを参考にすると、「ウチニ節の述語は atelic 動詞に頼る」という記述の方が妥当かもしれない。

〈中世末期日本語のウチ（二）節の節述語について〉

- ・ atelic な動詞の例が比較的多い。
- ・ 当時のウチ（二）節の特徴を考慮しても、～テイルという形式が現れることに問題はない。

節述語の解釈が比較的安定しており、現れる形式も共通しているので、現代日本語のウチ（二）節と中世末期日本語のウチ（二）節の節述語に現れる～テイルと動詞基本形を観察することによって、中世末期日本語の～テイルと動詞基本形の関係がどのようであったのか、また、～テイルが弱進行態を（現代日本語の～テイルのように）問題なく表していたのかどうかを確認できると思われる。

まず、次節で現代日本語のウチ（二）節の節述語について観察したい。

3. 現代日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形

浅野 1975 等の研究や小説の例などから、現代日本語のウチ（二）節の節述語には、～テイルが現れやすいこと、そして、～テイルが表している状態が比較的多様であることが確認できる。

- | | |
|--|-----------|
| (11) ドアの <u>開いて</u> いるうちに、駅弁を買って来い | (森田 1985) |
| (12) バスを <u>待って</u> いるうちに、タクシーが来た | (浅野 1975) |
| (13) 話して <u>いる</u> うちに、だんだん落ち着いてきた | (浅野 1975) |
| (14) 森の中の道を歩いて <u>いる</u> うちに奇妙な音が耳につくようになった。 | (世界の終り) |
| (15) 料理を作 <u>って</u> いるうちに、今日の客が到着した | (天野 1997) |

(11)～(15)の下線部分を見ると、(11)の～テイルは結果継続を表しており、(12)～(15)の～テイルは動作継続を表している。動作継続を表している例をさらに詳しく見ると、(12)(13)(14)のように atelic な動詞（句）が～テイルをとって動作継続を表している例（金水 1995 でいう弱進行態の例）もあれば、(15)のように telic な動詞（句）が～テイルをとって動作継続を表している例（金水 1995 でいう強進行態の例）もある。また、(12)のように具体的な動きのない動作継続（福嶋 2000a、福嶋 2000b でいう静的な動作継続）の例もあれば、(13)～(15)のように、具体的な動きのある動作継続（福嶋 2000a、福嶋 2000b でいう動的な動作継続）の例もある。

現代日本語のウチ(二)節の節述語において、～テイルは盛んに用いられており、特に動作継続を表していると言われるような～テイルであれば、概ね、ウチ(二)節の節述語として現れることができるものである。

以下の(16)に見るよう、動詞の基本形も、現代日本語のウチ(二)節の節述語として現れ、～テイルと近い解釈になる場合がある。ただし、動詞基本形の場合は、用法などに比較的制約があるようで、～テイルに比べると生産的ではないといえる。

(16) 彼と何度も会ううちに彼の奇妙な癖に気がついた (近藤 1993)

本稿では、中世末期日本語との比較を考え、現代日本語のウチ(二)節の節述語に現れる～テイルと動詞基本形について用例数の調査を行い、具体的な数値を見ておくこととする。

今回の調査では、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」の中の1940年以降に生まれた日本人作家の作品（論文末尾「調査資料」参照）を現代日本語の資料とした⁸。

資料の中には、(17)のような存在動詞の例が2例あったが、本稿では動詞基本形が用いられるということと、存在動詞が用いられるということを分けて考えたいので、これらの例は動詞基本形の用例数として数えないことにする。

(17) 心があるのなら、心があるうちにそれを備かせなさい。 (世界の終り)

また、(18)のような「～テイク」の例が10例あったが、この形式は、ある種のアスペクト形式であると見なせるので、動詞基本形の用例数として数えていない⁹。

(18) それは、ルボライターとしての仕事を續けていくうちに身についた、ひとつつの習性のようなものだった。 (一瞬の夏)

上記のことを踏まえた上で、ウチ(二)節の節述語に現れる～テイルと動詞基本形の用例数を示すと次の通りである。

*8 小説において見られる状況を、そのまま現代日本語の実態とするわけにはいかないので、今後、新聞・シナリオ等の資料も含めた形で再調査する必要があると考えている。

*9 「～テイク」の用例の中には、本動詞的にも解釈できる例が若干あったが、大勢に影響はないと判断した。

(19) 用例数（延べ） ~テイル 112例 動詞基本形 9例

(20) 比 (~テイル:動詞基本形) 約 12:1

砂川 1986 が「(ウチ二節の節述語が) 動的述語のばあいは「シテイル」をつかうことがおおい (括弧は福崎)」と指摘している通り、現代日本語においては、動詞基本形よりも~テイルの方が多く用いられていることが確認できる (なお、~タ+ウチ (二) という例は無かった)。

また、傾向としては、結果継続を表している~テイルよりも、動作継続を表している~テイルの方が多いようである。

(21) しかし歩いているうちに胸が悪くなってきて、道端に鼻面をすりつけるよ
うにして胃の中の物を出しました。 (録音)

(22) 頭骨にあてられた彼女の細い指をしばらく眺めているうちに、僕は以前ど
こかでその頭骨を見たことがあるという強い既視感のようなものに襲われ
た。 (世界の終り)

(23) 私は話しているうちに、薄気味悪くなってしまった。 (若き数学者)

(24) とにかく、それで倉庫を整理しているうちに、彼は一九一八年に義弟が置
いていった箱をみつけて開いてみたの。 (世界の終り)

次に、動詞基本形について述べる。今回の調査では、動詞基本形の例は 9 例 (延べ数) あった。動詞を示すと、「繰り返す」「つづける」「書く」「通う」「進める」「進む(2 例)」「続く(2 例)」である。~テイルに比べると用例数が少なく、用法 (あるいは動詞の意味) などに制限があるようである (近藤 1993、沢田 1986 等参照)。

このように、現代日本語では、ウチ(二)節の節述語として、~テイルの方が主に用いられている。もちろん、~テイルに関しても、「死んでいるうちに」等の例は採集できず、また、このような例は普通は許容できないので、何らかの制約が考えられるが、「ウチ (二) 節の節述語には主に~テイルの方が用いられている」という傾向を覆すものではないといって良いだろう。

本節をまとめると次のようになる。

(25) 第3節のまとめ

- ・動作継続を表していると言われるような～テイルであれば、概ね、ウチ（二）節の節述語として現れることができる。
 - ・ウチ（二）節の節述語には主に～テイルの方が用いられている。
- 比（～テイル：動詞基本形） 約 12：1

この(25)を念頭において、中世末期日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形を観察したい。

4. 中世末期日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形

中世末期日本語の資料として、狂言台本虎明本、天草版平家物語、天草版伊曾保物語、蘿睡笑、きのふはけふの物語の調査を行った（論文末尾「調査資料」参照）。

尊敬・受け身を表す助動詞などが接続している例は、動詞基本形の用例数に入れている。また、当該のウチ（二）節が、主節との時間関係を表しているのかどうか、判断が微妙な例が若干あったが、これらの例は、以下に示す調査結果から外している。ただし、これらの例を全て考察対象の中に入れても、本稿の結論に決定的な支障は来さない。当該資料中、「申たる」の例が 1 例あったが、この例は、～テイルでも動詞基本形でもないので用例数から外している。なお、今回の調査では漢字の「中」を使用している例は、ウチ（二）節の用例として数えないという方針をとった^{*10}。次に見る(26)のような存在動詞の例が 4 例あったが、このような例は、第 3 節で述べたことと同様の理由で考察対象から外し、動詞基本形の用例数として数えていない。

*10 本稿の関心の範囲から、漢字の調の問題について述べたい。「倭王篇」などの古辞書を参考にすると、「内（に）」の場合、「うち（に）」とよむ可能性が高いので用例とした。一方、「中（に）」は「なか（に）」とも「うち（に）」ともよめ、調を決定できない場合があった。そこで、今回の調査では漢字の「中」を使用している場合は、ウチ（二）節の用例として数えないという方針をとった。念のため、当該資料中において、漢字の「中（に）」節、及び平仮名の「なか（に）」節を全て調査したが、本稿の主張に対し、決定的な支障を来すような用例は見つからなかったことを付け加えておく。

(26) 是も、一日なりとも世に有うちに寺をもわたされ候へば、満足いたし候
が、死なれてあとは、我らより外に取り手がなく候間、これもつて思に
ならず
(きのふはけふの物語)

これらのこととを踏まえた上で、時間関係を表すウチ(二)節の節述語に現れる～テイルと動詞基本形の用例数を示すと次の通りである。

(27) 用例数 (延べ) ～テイル 4例 動詞基本形 62例

(28) 比 (～テイル：動詞基本形) 2:31

ここから、中世末期日本語においては、～テイルよりも動詞基本形が多く用いられていることが確認できる。現代日本語の場合だと、比 (～テイル：動詞基本形) は、およそ 12:1 であるのに対し、中世末期日本語の比は 2:31 (約 1:16) であり、比率は、ほぼ逆転している。

当該資料中、ウチ(二)節の節述語として現れる～テイルは以下の例で全てである。

(29) はじめおとこ出て、つやしている内、女右のなのりのことくいひて、ま
ちていたがましにて候
(虎明本・二九十八)

(30) いかにシャント、我がまだ生きて居るうちに別の妻をば、何としてお持
ちあらうぞ？ (例文(8)再掲)
(天草版伊曾保物語)

(31) 三番めにあしをとられているうちに、文をひきさく事もあり、
[相撲で足を取られている状態である]
(虎明本・文相撲)

(32) どれをとらふと云て、はいつているうちに、ていしゆいでて、
[盗人が物色している最中に、亭主が出てくる場面]
(虎明本・盆山)

用例数が少ないため、～テイルの例の具体的な特徴を指摘することは難しいが、そもそも～テイルの用例数が少ないとこと自体が、現代日本語のウチ(二)節には見られない特徴である。

これらの～テイルの例は、静的な動作継続を表しているか、結果継続を表してい

るかのいずれかであって、「具体的な動きのない（あるいは具体的な動きが想定しにくい）状態を表している」という点は、(29)～(32)までの～テイルに共通している。現代日本語の～テイルとは異なり、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を表している例は1例もない。次に見る動詞基本形との対比において、この特徴は一層はっきりとする。

中世末期日本語では、～テイルに比べ、動詞基本形の例が多い。ウチ(二)節の節述語として現れる動詞基本形は次のものである。（意味の取りにくい例には、括弧の中に現代語の解釈を示す。数字は延べ数である。また、一部わかりやすさを優先させ表記を変更している）

- ・狂言台本虎明本 49例（会話部分3例、ト書き部分46例^{*11}）：申す（2）、仰らるる、云ふ（11）、はやす（3）、ぬぐ（2）、ほむる（2）、わたる（2）、いよふとする（射ようとする）、うつ、きる（着る）、こしらへる、談合する、つくる（付ける）、まはる、あなたこなたへよる、ざうたんして行、しんをとる、きする（着せる）、見る、水かくる、わきめふる、一いのりいのる、せむる、さかもりする、一反おいまはる、じぎをする、つれてくる、うたふ、わらふ、つえを尋る、一どける（一度蹴る）、おしゃう（押し合う）、とりさへる
- ・天草版平家物語 9例：さうさうする（3）、こしらゆる、逆茂木をのけなんどする、言わるる、とかうすかしまらする、さうさうせらるる、深い歩かるる
- ・きのふはけふの物語 3例：いふ（2）、わが皇のかよふ
- ・醒睡笑 1例：見る
- ・天草版伊曾保物語 0例

動詞基本形の例を全体的にみると動作動詞（句）が多い。従って、動詞基本形の例の多くは、現代日本語で解釈する場合には、動作継続を表す～テイルを用いて解釈されるだろう。そして、以下の例にみるように、動詞基本形には「具体的な動き

*11 虎明本のウチ(二)節の多くは、ト書き部分にみられる（ウチ二節に関しては天野 1997 参照）。また、主節の主語と従属節の主語とが異なっている用例が多いが、本稿の議論に対して大きな問題にはならないと判断した。

のある動作が継続している」という解釈になる例が多く見つかる。

- (33) まはる内がんみ付て (虎明本・雁森)
- (34) それからいしやうぬぐうちに、がくなり、一いろづつ、つぎつぎへわた
し、(虎明本・唐相模)
- (35) 水かくる内、女出て、なふかなしや、何といふぞ、わらはが所の人と、
ととさまといさかひをめざると云かと云て、(虎明本・水掛舞)
- (36) あなたこなたへよる内、がんは大臣ばしらのかたに、大臣えほしをく也
(虎明本・雁森)
- (37) 酒をいだして、さかもりするうちに (虎明本・若菜)
- (38) ひやうしにかかつてうつ内に、かたなをみせぬやうにいだす
(虎明本・宝の鑑)
- (39) ぶたい一反おいまはる内に、ちう人いでて、(虎明本・吃り)
- (40) 又、そばへより、おしやう内に、たちをはく、はいたをみて、いやここ
なと云て、ばいやう
〔「おしやう」は「押し合う」と解釈した〕 (虎明本・長光)
- (41) 雁のうりて、太郎くわじやひとり事云内に、つづみおけの上に、大臣え
ほしを置、いつもちや屋のいる所に出しまちてゐる (例文(9)再掲)
(虎明本・雁盗人)

当該の形式が表している状態に、具体的な動きがあるかないか（あるいは具体的な動きが想定しやすいか否か）という観点から、～テイルと動詞基本形をまとめるところ次の表のようになる（本稿の注2でも触れたが、当該の形式が表している状態に、副詞「ゆっくり」を付けたとき、具体的な動きの速度が遅いという解釈ができるようなものであれば、「具体的な動きがある」と判断した。判断に迷う例は、〔 〕で

括り、具体的な動きのないものとして扱うこととする)。

〈表〉

	具体的な動きのないもの	具体的な動きがあるもの
～テイル	つやしている あしをとられている はいつている 生きて居る (延べ4例)	該当する用例なし
動詞基本形	見る 〔さうさうせらるる〕 〔さうさうする〕 〔わが息のかよふ〕 (延べ7例)	おしやう、云ふ、ぬぐ、わたる、いよふ とする(射ようとする)、水かくる、一反 おいまはる、うつ、きる(着る)、こしら へる、つくる(付ける)、まはる、あなた こなたへよる、ざうたんして行、しんを とる、きする(着せる)、わきめふる、は やす、せむる、さかもりする、申す、ほ むる、つれてくる、うたふ、わらふ、つ えを尋る、とりさへる、仰らるる、こし らゆる、逆茂木をのけなどする、漂い 歩かるる等 (延べ55例)

表から明らかなように、具体的な動きの有無（の想定しやすさ）といった観点からみると、～テイルと動詞基本形は、偶然とは言えないほどの偏った分布を示している。具体的な動きが想定できるか否かに関しては、人によって多少判断に揺れがあるかもしれないが、分布の偏りが見て取れる点は動かないと考えられる。

このことから、当時の～テイルは、弱進行態の中でも具体的な動きのあるものは、表しにくかったことがわかる¹²。また、当時の～テイルと動詞基本形の分布状況を記述する際には、具体的な動きの有無という観点がさしあたって有効であること、強進行態が弱進行態かというような telicity の観点からの分類だけでは不十分である

*12 今回の調査では具体的な動きを表している～テイルの例は無かったが、今後の調査によつては、具体的な動きを表している～テイルの例が採集できる可能性もあるだろう。本稿では、ウチ（二）節の節述語に具体的な動きを表している～テイルの例が全く現れないということを主張したいわけではない。ここでの重要な点は、表中で確認できるような分布の偏りから、当時の～テイルが弱進行態を問題なく表していたとは考えにくいということである。

こと、当時の～テイルが表しにくい部分は、動詞基本形が担っていたことなどがわかる^{*13}。また、今回は、ウチ（二）節以外の時間従属節（アイダ節など）を直接の考察対象としていないが、中世末期日本語のウチ（二）節以外の時間従属節を調べても、本稿の結論に対して決定的な支障を来すような用例は見つからなかったことを付け加えておく。

本節をまとめると次のようになる。

(42) 第4節のまとめ

- ・ウチ（二）節の節述語には主に動詞基本形の方が用いられている。

比（～テイル：動詞基本形） 2:31

- ・ウチ（二）節の節述語には、具体的な動きを表している～テイルの例はなく、当時の～テイルが、（現代日本語の～テイルのように）弱進行態を問題なく表していたとは考えられない。
- ・ウチ（二）節の節述語には、動詞基本形の例が多く、具体的な動きを表している例は全て動詞基本形で表されている。この点において、～テイルが表しにくかった部分を動詞基本形が担っていたといえる。

本節の表でみたような分布の偏りは、現代日本語には見られないものである。このような分布の偏りは、何を反映しているのだろうか。次節では、この分布の偏りの背景について述べたい。

5. 考察

本稿の冒頭でも触れたが、福嶋 2000a、福嶋 2000b では、中世末期日本語の～テ

*13 中世末期日本語の動詞基本形について補足説明をしたい。当時の動詞基本形の例は、動作継続を積極的に表しているというよりは、いわゆる「超時（あるいは、動きの概念そのもの）」の延長として捉える方がより自然であるかもしれない（この考え方は、尾上 1982、土岐 2000 等を参考にした）。しかし、いずれにせよ、本稿の立場としては、「中世末期日本語の～テイルが表しにくかった部分を動詞の基本形が補っていた」ことが言えれば十分である。動詞基本形が表しているものを、動作継続を表していると解釈するべきか、「超時（あるいは、動きの概念そのもの）」の延長として解釈するべきかという問題は、本稿の目的を越えたところにある。

イルが動作継続を表している場合は、（発話に関係する例を除くと）動的な動作継続を表していると解釈できる確例がほとんどないこと、～テイルのアスペクト形式としての不十分さ（文法化の低さ）を支えるようなかたちで、動詞基本形が用いられていること等を指摘した。「～テイルは動的な動作継続を表している例が少ない」「～テイルのアスペクト形式としての不十分さを動詞基本形が補っている」ということは、中世末期日本語のウチ（二）節だけでなく、当時の～テイルと動詞基本形全体を通して確認できることである。よって、中世末期日本語のウチ（二）節に見られる分布の偏りは、ウチ（二）節のみの問題として捉えるよりも、中世末期日本語の～テイル・動詞基本形全体の問題として捉える方が妥当であるといえる。このことを簡単に述べると次のようになる。

- (43) 本節で問題としている分布の偏りは、ウチ（二）節のみに見られるものではない。従って、ウチ（二）節のみの問題として捉えるよりも、中世末期日本語の～テイル・動詞基本形全体の問題として捉える方が妥当である。

ところで、坪井 1976、山下 1996 等を参考にすると、現代日本語の～テイルは文法化的度合いが高いといえる。一方、中世末期日本語の～テイルに関しては、福嶋 1999、福嶋 2000a、福嶋 2000b、安・福嶋 2001 で、「主格が有情物に限定されること」「動作バーフェクトと解釈できる例が見られないこと」「～テイルの縮約形～テルが使われだすのは、近世後期の江戸語からであること」等の理由から、～テイルの文法化的度合いが、現代日本語の～テイルに比べて低いことを確認している。

これらのことと、第3節・第4節での観察をまとめると次のようになる。

- (44) 現代日本語：～テイルの文法化的度合いが比較的高い。
 　　・ウチ（二）節の節述語には主に～テイルが用いられている。
 中世末期日本語：～テイルの文法化的度合いが比較的低い。
 　　・ウチ（二）節の節述語に～テイルはあまり用いられていない。

ウチ（二）節の節述語に～テイルが現れる割合と、～テイルの文法化的度合いとは相関していると考えられる。このような現象を単なる偶然とする見方もあるだろ

う^{*14}。しかし、時間関係を表すウチ(二)節の節述語の解釈は、現代日本語と中世末期日本語とで大きく変わらないと考えられるにも拘わらず、ウチ(二)節の節述語に見られる～テイルと動詞基本形の割合には大きな変化が見られること、及び上記(43)で確認したことなどを重視し、本稿では、中世末期日本語のウチ(二)節の節述語に見られる分布の偏りは、「中世末期日本語の状態化形式としての～テイルの文法化的度合いを反映している」と解釈する方が妥当であると考える。

第4節でみた～テイルと動詞基本形の分布の偏りに沿って、～テイルの文法化的度合いを具体的に述べると次のようになる。

- (45) 中世末期日本語の～テイルの文法化的度合い：当時の～テイルは、まだ、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を、十分に表せる段階ではない。

6. まとめ

本稿で述べてきたことをまとめると次のようになる。

(46) 本稿の主要な結論：

- (i) 中世末期日本語の時間関係を表すウチ(二)節の節述語において、～テイルの例は少なく、これらの～テイルの例には、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を表していると解釈できる例はない。一方、動詞基本形の例は多く、具体的な動きのある動作継続を表していると解釈できる例は、全て動詞基本形である。この点において、当時の～テイルが表しにくかった部分を動詞基本形が担っていたといえる。
- (ii) 上記(i)の分布の偏りから考えると、中世末期日本語の～テイルは、現代日本語の～テイルほど自由に弱進行態を表していたとは考えられない。

*14 例えば、中世末期日本語のウチ(二)節には何らかの特殊性があると記述し、その特殊性が、現代に近づくにつれて弱くなってきたのだ、というような見方である。ウチ(二)節の特殊性が弱くなることと、～テイルの文法化的度合いが高くなることが関連付けて説明されない限り、ウチ(二)節の述語に～テイルが多く見られることと、～テイルの文法化的度合いが高いことは、単なる偶然だということになるだろう。このように考えた場合、上記の(43)も、単なる偶然ということになりかねない。

(iii) 上記(i)の分布の偏りは、中世末期日本語の状態化形式としての～テイルの文法化の度合いを反映していると解釈するのが妥当である。

〈分布の偏りから考えられる～テイルの文法化の度合い〉

当時の～テイルは、まだ、具体的な動きのある動作継続（動的な動作継続）を、十分に表せる段階ではない。

中世末期日本語の～テイル・～テアルに関して、福嶋 1999、福嶋 2000a、福嶋 2000b、及び安・福嶋 2001 等では、現代日本語に比べ、中世末期日本語の～テイル・～テアルには、存在動詞イル・アルの意味が強く残っているため、アスペクト形式として相対的に不十分であることを指摘した。そして、主に主節末のデータの検討から、～テイル・～テアルの不十分さを～タと動詞基本形が補っていたことも併せて指摘した。本稿の結論は、結果的に、これらの指摘を補強することになる。

また、安・福嶋 2001 では、中世末期日本語の～テイルは、存在様態（存在文の表している状態に近い状態）的な例に偏ることを示し、存在という意味を中心として、存在型アスペクト形式が拡張するという方向を示唆した。典型的な存在様態の例（「廊下に太郎が立っている」等）は、具体的な動きを表さないので、本稿の結論は、安・福嶋 2001 で示唆した方向を支持するものであるといえる。

また、当時の～テイルの分布や～テイルの文法化の問題をより詳細に記述するためには、存在という意味に関係のある概念（野村 1994 の「存在様態」か、あるいは外延的に極めてそれに近い概念）を導入する必要があると考えているが、この点に関しての詳しい議論は別稿で論じたい。

少なくとも今回の調査から、中世末期日本語の～テイルが弱進行態を問題なく（現代日本語の～テイルのように自由に）表していたとは考えられないことが確認できたと思う。今回の確認が妥当であれば、当時の～テイルを記述する際や～テイルの文法化の問題を考察する際には、telicity の観点を導入するだけでは不十分だということになる。

また、安・福嶋 2001 で指摘した通り、中世末期日本語のアスペクト体系と現代韓国語のアスペクト体系には、ある種の共通性がみられる。この点もさらに詳しく考察していきたい。

《主要参考文献》（ハングル表記はローマ字表記に改めた）

浅野百合子 1975 「うちに」「あいだに」「まに」をめぐって（『日本語教育』27）

- 天野みどり 1997 「～ほどに」と「～うちに」——中世語の時間従属節—— (新潟大学『国語国文学会誌』39)
- 安 平鎬 2000b 「結果相を表す表現と空間表現との共起関係——日韓対照を中心に——」(『空間表現と文法』くろしお出版)
- 安 平鎬 (印刷中) 「韓国語の「タ」:「hayss-ta」をめぐって」(『タの言語学』ひつじ書房)
- 安 平鎬・福崎健伸 2001 「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系——アスペクト形式の分布の偏りについて——」(筑波大学「東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書平成12年度IV PART I」)
- 井島正博 1991 「従属節におけるテンスとアスペクト」(東洋大学『東洋大学日本語研究』4)
- 井島正博 1996 「相対名詞または格助詞による時の副詞節」(『山口明穂教授還暦記念国語学論集』)
- 井上 優 (印刷中) 「現代日本語の「タ」——主文末の「…タ」の意味について——」(『タの言語学』ひつじ書房)
- 遠藤嘉基 1962 『新講和泉式部物語』(塙書房)
- 岡 智之 1999 「存在構文に基づくティル(テアル)構文——認知言語学的アプローチによる文法構文の研究——」(大阪外国語大学『EX ORIENTE』1)
- 奥田靖雄 1978 「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」(『教育国語』53, 54)
- 尾上圭介 1982 「現代語のテンスとアスペクト」(『日本語学』12月号)
- 金水 敏 1995 「いわゆる「進行態」について」(『集島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院)
- 金水 敏 1996 「日本語のアスペクト形式の類型」(『国語学会平成8年度春季大会要旨集』1996年5月19日、於:青山学院大学)
- 金水 敏 1997 「現在の存在を表す「いた」について——国語史資料と方言から——」(『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房)
- 金水 敏 1999 「近代語の状態化形式の構造」(『近代語研究』第十集 武藏野書院)
- 金水 敏 2001 「文法化と意味——「～おる(よる)」論のために——」(『国文学 解釈と教材の研究』46-2)
- 草薙 裕 1981 「従属節および関係節におけるテンス・アスペクトについて」(『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』大修館書店)
- 工藤真由美 1989 「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」(横浜国立大学『横浜国立大学人文紀要(第2類 語学・文学)』36)
- 工藤真由美 1995 「アスペクト・テンス体系とテクスト——現代日本語の時間の表現——

—』(ひつじ書房)

- 言語学研究会・構文グループ（笠松郁子、菅原厚子、鈴木美都代、登野ルリ子）1993
「同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文——「あいだ」と「うち」——」(『ことばの科学』6 むぎ書房)
- 國廣哲彌 1978 「時間接続表現の意味——意義素の分析——」(東京大学「国語と国文学」55-5)
- 久野 瞳 1973 「日本文法研究」(大修館)
- 権奇 淳 1992 「「うちに」と「あいだに」について——時間的限定を表す用法を対象として——」(東北大学「日本語学科論集」2)
- 近藤真宣 1993 「時間を表わす従属節内のテンス・アスペクトについて」(拓殖大学「語学研究」71)
- 沢田奈保子 1986 「複合接続助詞「うちに」の時を特定する用法の分類」(『ことば』7)
- 沢田奈保子 1991 「「ウチニ」と「アイダニ」——使い分け要因の分析と記述——」(大版大学「日本学報」10)
- 鈴木重幸 1979 「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい——」(『言語の研究』むぎ書房)
- 鈴木 泰 1992 「古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分析——」(ひつじ書房)
- 鈴木 泰 1993a 「源氏物語会話文における動詞基本形のアスペクト的意味」(武藏大学「武藏大学人文学会雑誌」24-2・3)
- 鈴木 泰 1993b 「時間表現の変遷」(『月刊言語』22-2)
- 鈴木 恵 1995 「和化漢文における時の形式名詞について」(『鎌倉時代語研究』第十八輯)
- 鈴藤和子 1984 「～あいだ / ～あいだに」(『日本語学』10月号)
- 砂川有里子 1986 「セルフマスター・シリーズ2 する・した・している」(くろしお出版)
- 坪井美樹 1976 「近世のテイルとテアル」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社)
- 寺村秀夫 1983 「時間的限定の意味と文法的機能」(『副用語の研究』明治書院)
- 土岐留美江 1999 「現代韻文資料における日本語動詞基本形のテンス」(京都大学「国語論文」68-6)
- 土岐留美江 2000 「中古語における動詞基本形終止文の機能」(『国語学会2000年度秋季大会要旨集』2000年10月29日、於：安田女子大学)
- 野村剛史 1994 「上代語のり・タリについて」(京都大学「国語論文」63-1)
- 野村雅昭 1969 「近代語における既然態の表現について」(『佐伯梅友博士古稀記念国語論文』)

(学論集) 表現社)

- 朴 錦升 1999 「古代日本語動詞原形の意味・用法——テンス的意味の認否について——」(学習院大学「学習院大学人文科学論集」8)
- 原田芳起 1958 「「うちに」の接続機能とその意味——中古特殊語法私考——」(『平安文学研究』22)
- 日野賀純 1996 「古典解釈のための基礎語研究」(東宛社)
- 日野賀純 1997 「古典文学の作品における「中」字の訓——ナカとウチの意味分析——」(東京大学「国語と国文学」74-2)
- 福沢将樹 1997 「タリ・リと動詞のアスペクトチャラリティー」(『国語学』191)
- 福嶋健伸 1999 「中世末期日本語のシタについて——終止法で繼續相現在を表す場合を中心——」(『国語学会平成11年度春季大会要旨集』1999年5月30日、於:同志社大学)
- 福嶋健伸 2000a 「中世末期日本語の基本形について——終止法で現在の状態を表している場合を中心に——」(『国語学会平成12年度春季大会要旨集』2000年5月28日、於:専修大学)
- 福嶋健伸 2000b 「中世末期日本語の~テイル・~テアルについて——動作繼續を表している場合を中心に——」(筑波大学「筑波日本語研究」第五号)
- 堀川 昇 1980 「和泉式部日記の「うちに」をめぐって——背後の時間——」(実践女子大学「実践女子大学文学部 記要」22)
- 益岡隆志 1987 「命題の文法——日本語文法序説——」(くろしお出版)
- 益岡隆志 1992 「日本語の補助動詞構文——構文の意味の研究に向けて——」(『文化言語学 その提言と建設』三省堂)
- 村松由起子 1994 「「うちに」「まえに」「あいだに」「までに」について」(豊橋技術科学大学「雲雀野(人文・社会工学系紀要)」16)
- 森田良行 1985 「誤用文の分析と研究——日本語学への提言——」(明治書院)
- 森山卓郎 1988 「日本語動詞述語文の研究」(明治書院)
- 柳田征司 1987 「近代語「テアル」」(愛媛大学「愛媛国文と教育」19)
- 柳田征司 1990 「近代語の進行態・既然態表現」(『近代語研究』第八集 武藏野書院)
- 柳田征司 1991 「室町時代語資料による 基本語詞の研究」(武藏野書院)
- 山内洋一郎 1987 「諺曲の文法」(『国文法講座』第5巻 明治書院))
- 山崎和夫 1994 「「~ウチニ/~ウチハ」と「モウ/マダ」の視点——時間接続名詞を取り立てのハを巡って——」(北九州大学「文学部紀要」50)
- 山下和弘 1988 「「テ+イル」と「テ+アル」」(九州大学「語文研究」65)

山下和弘 1996 「中世以後のテイルとテアル」（京都大学「國語國文」65-7）

湯澤幸吉郎 1928 「天草本平家物語の語法」（『教育』539）

湯澤幸吉郎 1929 「室町時代の言語研究」（大岡山書店）

Backhouse, A.E., and Hiroko Quackenbush 1979. "Aspects of *uchi* Constructions". *Papers in Japanese Linguistics*, 6 (Japanese Linguistics Workshop)

Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliucca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge : Cambridge University Press.

Comrie, Bernard. 1998. "Perspectives on Grammaticalization". Toshio Ohori(ed.):*Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, Tokyo : Kuroso Publishers.

Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Maslov, Jurij S. 1988. "Resultative, Perfect and Aspect", in Vladimir P. Nedjalkov (ed.): *Typology of Resultative Constructions*. Amsterdam: John Benjamins.

Nakao, Minoru. 1976. "Tense, Aspect, and Modality". in Masayoshi Shibatani (ed.):*SYNTAX and SEMANTICS VOLUME 5: Japanese Generative Grammar*. New York, San Francisco and London : Academic Press.

Shirai, Yasuhiro. 1998. "Where the Progressive and the Resultative Meet Imperfective Aspect in Japanese, Chinese, Korean and English". *Studies in Language* 22:3.

〈調査資料〉

〈現代日本語の調査資料〉

「CD-ROM 版 新潮文庫 100 書」（発行：新潮社 1995）に収録された作品の内、1940 年以降に生まれた日本人作家の 7 作品全てを現代日本語の調査資料とした。以下に収録作品名・著者名および本文中で引用したものはその略号を記す（作者五十音順）：赤川次郎「女社長に乾杯！」、沢木耕太郎「一瞬の夏」（一瞬の夏）、椎名誠「新橋烏森口青春篇」高野悦子「二十歳の原点」、藤原正彦「若き数学者のアメリカ」（若き数学学者）、宮本輝「錦織」（錦織）村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」（世界の終り）

〈中世末期日本語の調査資料〉

- 池田廣司・北原保雄 校注「大藏虎明本狂言集の研究」上中下巻、表現社、1972（略称：虎明本） 風流之本、万集類は調査対象外とした。
- 江口正弘 著「天草版平家物語対照本文及び総索引（本文篇）」、明治書院、1989（略称：天草版平家物語）
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編「文禄二年耶蘇会板伊曾保物語本文・翻字・解題・索引」、京都大学国文学会、1963（略称：天草版伊曾保物語）
- 岩淵匡他 編「醒睡笑静嘉堂文庫藏本文編」、笠間書院、1982（略称：醒睡笑）
- 「きのふはけふの物語」小高敏郎 校注「江戸笑話集」（日本古典文学大系）、岩波書店、1966（略称：きのふはけふの物語）

（中世末期日本語の調査・考察の際に、以下のものを参考にした）

- 土井忠生訳「ロドリゲス日本大文典」、三省堂、1955
- 土井忠生・森田武・長南実 編訳「邦訳 日葡辞書」、岩波書店、1980
- 中田祝夫・北恭昭編「倭玉篇 研究並びに索引」、風間書房、1966
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編「元龟二年京大本 運歩色葉集」、臨川書店 1969
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編「天正十七年本 運歩色葉集」臨川書店、1977
- 小島幸江編「耶蘇会板 「落葉集」総索引」、笠間書院、1978

〔付記〕

本稿の内容に関して、天野みどり先生（和光大学）より有益なコメントを頂いた。記して感謝申し上げます。ただし、言うまでもなく本稿の不備や誤りは全て筆者の責任である。

また、本稿は、日本学術振興会の研究助成及び平成 13 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（2001年6月28日 受理）